今日の日はさようなら、またあう日まで

行くところがないからしょうがない。もうあきらめた。放射能の中へ帰っていく。

このことばは仮設の方の口から出てきた言葉です。今まで黙ってきた言葉、本音の会話となりました。いつもニコニコ笑っているＧさんの家は修理できず壊れた家に住むことになります。川内村は広く行政区は８区あります。除染は役所のある５区を中心に行われており、自分達の帰る場所は除染されていないから畑もできないし、何もやることがないと嘆いています。隣同士がすぐ近くにある仮設と違い、足の悪い方は隣にさえ行くことができません。バスはあっても１日に３本くらい、かつバス停までは遠いのです。80 歳を過ぎた方々が人生の後半に２回も引越を余儀なくされその多くは独居です。３月いっぱいまでに引っ越す方々には補償があるそうです。また幸いにもご家族と暮らすことができたり、郡山に住む方もおられますが、その経済格差の故に会話に微妙な空気感が生み出されていることも話しながら察知できました。コミュニティの再崩壊は、あきらめ、孤独を生み出していくことは容易に想像できます。実際役場の方も「ケアをしていくけれどもあまりにも広く回り切れない」とも言っておられます。長い長いおしゃべりの後の彼らの言葉。私たちは来年度、川内村へいよいよ本格的に入って行きます。

「だけど、あんた達は来てくれるんだね。待ってるから。必ず会いに行くから。」

最後となる仮設訪問。いつものように始まりますが、皆がこれで「お別れ」とわかっているので精一杯元気を出して臨んでいます。少しでも気を許したら皆泣いてしまうからです。別れたくないのに別れなければならない現実、住み続けたいのに取り壊されてしまう現実、家族と住みたくとも住めない現実、震災後見ず知らず同士が築き上げてやっと生まれた信頼関係が今再び崩壊へと向かっていきます。「ここでの仲間は最高だ！」といった仲間は川内村へ帰ってもバラバラとなってしまいます。カエルのしん平くんが「希望を失うな、しんぺいねぇから」と話していきます。何故なら藤木先生も自分の言葉で語ったら涙が出てきてしまうからです。音楽療法はいつものように始まり手指の運動、歌、そして藤木先生団長による三々七拍子へと続いていきます。♪川の流れのように♪を歌い、最後に皆が手をつないで♪今日の日はさようなら♪を歌います。藤木先生が一人一人に声をかけ始めると、さめざめと皆が泣き始めました。彼らの支えと希望であった仮設閉鎖とそのコニュニティの解散の悲しみを共有した時でもありました。